

『完全なる料理』

サイトー

惑星間定期便はミニ二星人の独占状態だった。

亜空間飛行が一般化された現代においても惑星間旅行は長旅だ。

乗客が飽きないように映画や演奏会など各種イベントが用意されているが、風景を楽しめない宇宙空間において最大の楽しみといえばやはり豪華な食事だ。

宇宙定期便がミニ二星人の独占となったのも、彼らが開発した食品製造機によるところが大きい。この食品製造機は世界各国のあらゆる食事に対応できるすぐれものなのだ。

仕組みは簡単だ。材料は無味無臭の特殊食材を使用する。これは船内で製造することが可能だ。その無味無臭の特殊食材に味や香りのフレーバーを添加し、粘性を調節して食感を再現する。生物の味覚は単純だ。例えば地球人の場合だと塩味、甘味、酸味、苦味、旨味の五種類に過ぎない。わずかに五種類の味覚と香り、温度、さらに食感を合致させれば本物と偽物の区別などつきようがない。そこがミニ二星人のねらい目であった。

宇宙船の食堂は豪華だ。

抜け目のないミニ二星人は雰囲気も味を左右することをしっている。各テーブルは花で飾られ、天井からは豪華なシャンデリアがぶら下がっている。舞台では小さなオーケストラが食事中の会話を邪魔しない適度な音量でクラシック音楽をゆるやかに演奏する。

ある会社の重役が美女をつれて着席した。さっそくミニ二星人が

やってくる。

「今日はどのような食事にいたしましたでしょうか」

「今日のオススメはなにかね……と、ミニ二星ではすべてがオススメだったな」

「その通りでございます。全ての料理は地球上で最もすばらしいと評判のレストランの味を完全にコピーしています。ワインもあらゆるビンテージをご用意できます。たとえば、すでに地球上で飲み尽くされた一品でも」

「それはそうだな。ガハハハ。みんな好きなものを頼め。地球上ではキャビアはすでに取り尽くされたが、この宇宙船内ではいくらでも食べることができる。トリュフもフォアグラだって同じだ。わたしはこの料理を食べるためにこの宇宙船にのつておる。ここと比べると地球上の食事など糞みたいなものだ」

「お褒めの言葉、ありがとうございます」

ミニ二星人は深くかしこまった。

地球人もこの機械を模造しようとしたが、なにせ門外不出の秘密のうえに、キーポイントとなる技術が宇宙特許で守られている。

そのため、数社が挑戦したがすべて挫折した。なにしろミニ二星人が提供する料理の材料は宇宙船内で生産される特殊食材なのでとにかく安い。特殊食材の製造法を知らない地球人がいくら頑張ろうにもコスト面で太刀打ちできないのだ。もちろん、本物を売りにするレストランも同様だ。おまけに人工食材なのでカロリー調整も自由自在。ダイエットをしたいご婦人方までも大挙して宇宙船に乗り込んでくる。

乗客は料理を好きなだけ堪能し、満足して客室に戻る。なかには

飲み過ぎてトイレに駆け込む地球人も多い。それだけでなく食べ過ぎてもおぼす地球人が続出するので、ミニ二星人の宇宙船はトイレが多めに設置されている。そういう細かな気配りも人気の秘密だった。

大勢の客がレストランを訪れ、溢れんばかりの笑顔と多くの賞賛の声を残して客室に帰っていく。おかげで、ミニ二星人はいつも大忙しだった。

レストランの営業時間が終わった。

ミニ二星人は残飯を集めると厨房の奥にある再生装置に放り込んだ。この装置は厨房だけでなくトイレにも繋がっており、あらゆる排泄物が一箇所に集められる。

排泄物は水分を除去した上で熱源により乾燥させられ、強力な紫外線で完全なる殺菌、脱臭がほどこされ、粒上になった廃棄物をミルで粉碎し、再度、乾燥、殺菌、脱臭が繰り返される。もちろん蒸発した水分も回収される。

粉末状の物質に触媒と特殊な菌を混ぜ合わせ、光と同時に宇宙船内にたまった二酸化炭素を圧縮して吹き付け、光合成に類似した現象を急速に起こさせる。

こうして完成した特殊食材はタンクに貯蔵され、次の日には再び完全なる料理として地球人に提供されるのだ。

ミニ二星人は地球人の英知に驚いていた。いまは廃れてしまったが、過去の地球では糞尿で農作物を育てていた。ミニ二星人はそのことに驚嘆し、感動し、自分の星に情報を持ち帰った。この装置はそのサイクルを早くして再現したものに過ぎない。

いまは門外不出の秘密のため地球人に教えるわけにはいかないが、自らの糞尿を食べていることを地球人が知れば、自分たちの文化が認められたと歓喜するに違いない……。